

ヤーコブ・ファン・リースフェルトの聖書

——宗教改革期アントウェルペンにおけるテキスト、イメージ、印刷物——

石田友里

はじめに

ルターに始まる 16 世紀宗教改革は、カトリックの伝統的儀式が持つ権威を退け、「聖書のみ」という原理を打ち出し、聖書の重要性を決定的にした⁽¹⁾。ルターのドイツ語訳聖書(以下、ルター訳聖書)が、印刷術の発展を受けて多数印刷されたことを皮切りに、地理的量的に普及した「聖書」という書物を多くの人が手に取るようになったとされる。同じ頃、国際貿易で栄えた商業都市アントウェルペンでも、商品の流通網の発達、識字率の上昇などを背景に印刷・出版業が最盛期を迎えることになり、約 66 の印刷業者がネーデルラントにおける出版の 55 パーセントを担っていた⁽²⁾。ルターの宗教改革運動は、彼の著作とともにアントウェルペンの印刷業界にも大きな影響を与え、1520 年代から 30 年代にかけてアントウェルペンは宗教改革派書籍出版の拠点となる。ルターの著作やルター訳聖書がオランダ語やラテン語で出版されたほか、宗教改革派の教理問答や信仰告白集などが、16 世紀半ばまで常に刊行されていた⁽³⁾。一方で、そうした潮流を懸念した聖俗の権力、すなわちローマ教皇や神聖ローマ皇帝は、宗教改革派の教えを広める「異端」の印刷物の取り締まりや印刷・出版業者に対する弾圧を始める⁽⁴⁾。

1. 本稿の目的

『リースフェルト聖書』は、こうした状況下で既存のルター訳聖書に基づいて刊行

された聖書のひとつだった。アントウェルペンで活躍した印刷業者ヤーコプ・ファン・リースフェルト（1490頃-1545年）は、1526年、旧約聖書と新約聖書を揃えた初の完全版オランダ語聖書を出す⁽⁵⁾。従来のオランダ語聖書は、旧約または新約の一部のみの出版で挿絵もほとんどないものだったが、この『リースフェルト聖書』を皮切りに、挿絵が豊富に施された完全版オランダ語聖書が次々と登場する⁽⁶⁾。オランダ語聖書の歴史に記念碑的業績を残したリースフェルトだが、印刷した書籍が宗教改革期の取り締まりの対象となり、1545年に処刑されてしまう。さらに1546年の『ルーヴェン禁書目録』で、『リースフェルト聖書』は異端書として禁書指定を受けることになった。その後、ネーデルラントの宗教改革派によって読み継がれた『リースフェルト聖書』を通して、リースフェルトは新しい改革派の教えを広めるためにオランダ語聖書を出版し、信仰を貫いた「神の言葉の殉教者」と見なされるようになった⁽⁷⁾。

しかし近年の研究では、リースフェルト自身の信仰に関する歴史的根拠の希薄さから、そうした従来のリースフェルトのイメージには疑問が呈されている⁽⁸⁾。リースフェルト自身の信仰が、聖書の出版に直接結びつくものでなかったとするのならば、リースフェルトの聖書はどのように位置付けられるのだろうか。宗教改革派の聖書と見なされる『リースフェルト聖書』だが、その版画挿絵には、同時代のドイツで出された宗教改革派のビラやパンフレットに見られるような、カトリックへの批判や偶像崇拝に対する非難といった視覚的プロパガンダは見当たらない。さらに、宗教改革派の思想を表現していると従来考えられてきた図像は、実際はカトリック、宗教改革派の聖書の両方に使用されていたことも明らかになっている⁽⁹⁾。したがって、これまで指摘されてきたような特定の図像が、宗教改革派の聖書の目印となっているとは考えられない。しかし、リースフェルトの聖書は取り締まりの対象となり、宗教改革派の聖書と見なされてきた。それでは、『リースフェルト聖書』には実際どのような特徴があるのだろうか。

本稿では、『リースフェルト聖書』のテキストとイメージ、とりわけタイトルページと旧約聖書の版画挿絵に注目してその特徴を明らかにし、当時の社会的背景と合わせて考察する。宗教改革期は、聖像論争やイコノクラスムという出来事に代表されるように、言葉とイメージと信仰とが絡み合う視覚文化再編のときだった。この時期の

イメージ研究の分野では、C・E・エーラらが神学的議論に着目し、D・フリードバーグなどが宗教改革期後の図像解釈に注目してきたが、近年F・ディーツらの研究がまとめられ、言葉とイメージと信仰を結びつける場としての印刷物への注目が高まっている⁽¹⁰⁾。本稿では、宗教改革が始まって間もなくアントウェルペンで出された『リースフェルト聖書』の特徴を明らかにすることで、宗教改革派のアイデンティティー形成の過程に関わる印刷本聖書のイメージがどのように用いられていたのか、どのような役割を果たしたのかを検討する。この印刷物を文化的・宗教的・社会的背景が交差する場として浮かび上がらせ、16世紀前半から半ばにかけてのアントウェルペンにおける宗教改革期イメージ研究の第一歩としたい。

2. 『リースフェルト聖書』の特徴1——タイトルページ

まず、タイトルページの意匠について注目する⁽¹¹⁾。本の宣伝という商業的役割と、本の保護という実用的機能を兼ね備えたタイトルページのデザインの発展については、ドイツのルーカス・クラナハ工房の貢献が有名だが⁽¹²⁾、『リースフェルト聖書』のタイトルページも独自のデザインを確立している。個別の装飾版木を組み合わせて刷るのではなく、フォリオ判の木版一枚に彫り出された枠内に、別途活字のテキストが印刷されている。『リースフェルト聖書』オリジナルのタイトルページであり、1526年以降、リースフェルトが出版する聖書に用いられた⁽¹³⁾。

全体は、貝殻装飾天井を持つニッチを表したルネサンス風の建築的要素と、5人の人物像、2人のプッターが支えるプリンターズ・マークから成り立っている。天井部には十戒の板を指差すモーセがおり、その下のタイトル枠を取り囲むように、左右の柱に2人ずつ、パネルを身体の前で支える人物が立っている。パネルに書き込まれた聖書の引用から、この4人の人物像がそれぞれヨシュア、ダヴィデ、マルコ、ヨハネを表しているのが分かる⁽¹⁴⁾。

『ヨシュア記』1章〔8節〕、この律法の書を口から離すことなく、昼も夜も口

ずさみ〔そこに書かれていることをすべて忠実に守りなさい〕。『詩篇』19章〔9節〕、主の戒めは清らかで、目に光を与える。『マルコによる福音書』16章〔15節〕、全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。『ヨハネの手紙二』10節、この教えを携えずにあなたがたのところに来る者は、家に入れてはなりません。挨拶してもなりません⁽¹⁵⁾。

旧約と新約の人物が画面左右に対置される構図は、『リースフェルト聖書』を構成する新旧両約聖書の対を表す。これらのテキストは「神の言葉」、すなわち聖書の重要性を訴えていると解釈される⁽¹⁶⁾。さらに言えば、そのメッセージは直接読者へ投げかけられており、聖職者による仲介などなくとも、読者自身が聖書の言葉へ直に接することを呼びかけていると考えられる。

この特徴は、同時代の他の聖書のタイトルページと比較するとより明らかになる。例えば、アントウェルペンのウィレム・フォルステルマンが1528年に刊行した『フォルステルマン聖書』のタイトルページが挙げられる⁽¹⁷⁾。『リースフェルト聖書』に続く2番目の完全版オランダ語聖書となる『フォルステルマン聖書』は、タイトル枠内のテキストでカトリックの伝統に沿う「ウルガタ訳に基づいて改訂」された「検閲済 (Cum Gratia et Privilegio)」の聖書と謳われ、カトリックの正統な聖書であることが強調されている⁽¹⁸⁾。この1528年版のタイトルページは、合わせて9枚の枠組み装飾から成り立っており、旧約聖書のタイトルページと新約聖書のそれとで変化がつけられている。旧約聖書の方は、タイトルを挟んで左右に預言者イザヤ、エレミヤ、ダニエル、エゼキエルの4人が描かれている。下部には、画面に向かって左から右にスペインの枢機卿の紋章⁽¹⁹⁾、神聖ローマ皇帝とアントウェルペン市の紋章、フォルステルマンの印刷工房の屋号「金の一角獣」を示す紋章が並ぶ。こうした紋章には、後ろ盾となる権威を提示する狙いがあったと考えられる。

タイトルページ上部には、ハンス・ホルバイン (子) の作品を原型とする聖三位一体の枠組み装飾が用いられている。この図像では中央の父なる神の右側に、脇腹の傷口を示しつつ左手で人間救済のとりなしを行うキリストが立っている。下部の銘文に「唯一の主、〔そして〕主と人の唯一の仲介者、人間イエス・キリスト、彼はあらゆる

人に自らの贖いの恩恵を与える」とあるように、神と人間の仲介者としてのキリストの姿が描かれている⁽²⁰⁾。この「インテルセッシオ・クリスティ」の図像は、『フォルステルマン聖書』以前にもタイトルページに用いられていた⁽²¹⁾。こうした図像は、聖書の読み手の態度に関して聖なる言葉への直接的なアクセスよりも、間接的な関わりの方に重きを置いた表現として解釈することができるだろう。

以上のようにタイトルページを比較すると、直接的に提示される「神の言葉」と間接的に受け渡しされる「神の言葉」という違いが立ち現れる。すなわち、『リースフェルト聖書』のタイトルページは、とりなしの必要のない、直接読者へ向けられた聖書を表象するものとして浮かび上がってくるのではないだろうか。オリジナルのイメージとテキストで提示された、聖書を手取る人への直接的な呼びかけは、斬新な意匠を目指した印刷業者リースフェルトの野心を映し出すとともに、宗教改革派の理念「聖書のみ」を表すものだったと言えるだろう。

3. 『リースフェルト聖書』の特徴2——旧約聖書の図像

次に、旧約聖書の図像を検討する。1526年の『リースフェルト聖書』では、全部で48の挿絵のうち41が旧約聖書部分の挿絵であり、それは主に『リースフェルト聖書』が手本としたルター訳聖書からの引用とされる⁽²²⁾。

内容を詳しく見てみると、旧約聖書の祭具や建築物の図像には、大きな版木が用いられ、ページのレイアウトのなかで目を引く要素となっている。こうした図像のうち、1526年版から1542年版まで使い続けられたものをまとめるとある特徴が浮かび上がってくる【表1】。『出エジプト記』の版画挿絵は、十戒をモーセが授かり、イスラエルの民と主の契約が結ばれるときモーセが主から受けた指示を説明するものである。それは主のための聖なる場所、臨在の幕屋を作るためのものであり、掟の板を収める箱、主が降りる贖いの座、捧げ物をする机、燭台などの祭具、幕屋を覆う幕と壁板、祭壇、庭、手足を清めるための水盤などの大きさ、材質、作り方が細かく指示されている。また『列王記上』の版画挿絵は、ソロモンによる主の神殿建築を説明している。

神殿の内部には、臨在の幕屋から移された掟の箱が安置され、神殿の備品・祭具が用意される。これらの建物の完成は主の約束の成就、イスラエルの民との契約の確認を表す。すなわち、こうした版面挿絵には、神との契約・掟を収める箱、幕屋、神殿などを構築する過程が描かれていると言える。

これら主との契約を整えるための品々を表す版面挿絵の特徴として、祭具や建造物の描写を強調するかのようになり、ページの3分の1以上のスペースを占めていることが指摘できる。例えば、1528年の『フォルステルマン聖書』にも、祭具や建築物の描写は見られる。これらは『リースフェルト聖書』の場合と同じく、1523年のルター訳聖書の版面挿絵を原型とするものだった⁽²³⁾。しかし、その後の1532年に改めて刊行された『フォルステルマン聖書』では、1528年版の版木は変更され、新しい挿絵が使われると同時に、挿絵がフォリオ判のページに対して占めるスペースはより小さくなっている⁽²⁴⁾。

そうしたなか、『リースフェルト聖書』が1526年から同じ版木を使い続けたことは注目に値する。凸版の活字と木版画は組み合わせて印刷されるが、章の冒頭などにテキストの幅と同じサイズの挿絵を入れる方が、ページのレイアウトを容易に行うことができたと考えられる⁽²⁵⁾。『リースフェルト聖書』におけるテキストと挿絵の関係をよく見ると、活字と版画挿絵が重なりそうな部分など、レイアウトに試行錯誤した跡が見られる。書物を出版する1526年以前に制作、あるいは購入した版木が元々大きめのものだったとしても、レイアウトに苦心しながら同じ版木を敢えて使い続けたとするならば、そこに何らかの意味を見出すことができるのではないだろうか。

先行研究において、こうした図像は書物の装飾というよりもむしろ、聖書解釈のための図像だと考えられてきた⁽²⁶⁾。その根拠として、中世フランスの学僧リールのニコラウスの著作『全聖書注解』が指摘されている⁽²⁷⁾。14世紀の第二四半期から数多くの写本によってヨーロッパ中に普及した『全聖書注解』には、豊富な挿絵が付けられており、旧約聖書の祭具などの描写に影響を与えた。1481年には、ニュルンベルクのアントン・コーベルガーの工房から40ほどの挿絵付きで印刷本として刊行されている⁽²⁸⁾。

こうした印刷本『全聖書注解』の挿絵の表現は、確かに『リースフェルト聖書』に

見られるものと類似性を持っている。一方で、『リースフェルト聖書』は1526年版に初めて出された時点では、挿絵全体の数が限られていた上に、コーベルガーの『全聖書注解』の図解に見られるような彫り込まれた文字による説明も付け加えられていない。このことから、『リースフェルト聖書』の挿絵は、聖書のテキストの内容を単に図示するイメージにとどまるものではないと考えられる。

リールのニコラウスに先んじて、聖書に関する視覚的イメージの効果を説いた人物に、12世紀フランスの学僧サン・ヴィクトルのフーゴーがいる⁽²⁹⁾。彼の著作は、15世紀末から16世紀始めにかけて、ヴェネツィア、パリ、ストラズブール、アウクスブルクなどを中心に出版されている⁽³⁰⁾。フーゴーは中世に発展した聖書解釈法を用い、旧約聖書の「ノアの箱舟」を取り上げ、それを私たちの目に見える信仰心構築の規範として示した。フーゴーは「あなたに霊的構築物の規範として示すのはノアの箱舟です。〔箱舟を〕あなたの目は外的に見るでしょう。そして、あなたの魂は内的に〔その箱舟と〕似た物へ作り上げられることになるでしょう」のように述べている⁽³¹⁾。ここで、視覚的イメージとして身体が目で見ることのできるノアの箱舟建造の過程は、キリストが作った教会になぞらえられ、最後に人々の内的な信仰を作り上げる過程として解釈されている。

このように、キリスト教の教えに基づいた信仰生活を築き上げていく過程を、神殿や教会の建設にたとえることは、聖書解釈の上で伝統的に行われてきたことだった。イメージを通して、学んだことを反芻しつつ瞑想することは、信徒を物質的な領域からより良きものへの宗教的、精神的上昇に導くとされ、そこにはキリスト者としての精神的啓発が期待される。

これをふまえた上で、神との契約・掟を収める箱、幕屋、神殿などを構築する過程を描いた『リースフェルト聖書』の版画挿絵を見ると、視覚化された聖書における構築物は、読者の信仰心構築の表象として浮かび上がってくるだろう。別の言い方をすれば、神との契約のためのそれらの図像は、人々の信仰の拠り所である「聖書」そのものの寓意として解釈することができるのではないだろうか。『リースフェルト聖書』のタイトルページで、聖ヨハネが示していた聖句は、キリストの教えを携えて来る場所を「家」に例えている⁽³²⁾。このテキストは、それを取り囲む建築的な意匠とあい

まって、まさに神聖な構築物としての聖書を表しているように思われる。ここに、「神の言葉」を収める書物のかたちをした構築物としての聖書が示されていると言えるだろう。

4. 印刷業者に対する規制と処罰

最後に、『リースフェルト聖書』を取り巻いていた当時の社会的背景を明らかにする。1545年5月22日のアントウェルペン市の裁判記録から、リースフェルトが印刷した書物について裁判で糾弾されており、さらに同年11月27日の記録から、リースフェルト自身の訴えも虚しく死刑に処されたことが分かる。

ヤーコプ・ファン・リースフェルトに対して裁判長——裁判所にて挙げられた〔リースフェルトの印刷した〕それらの書籍は違法であるとした。我らが慈悲深き神聖ローマ皇帝陛下が長年施行なさってきた勅令〔に鑑み〕…⁽³³⁾。

ヤーコプ・ファン・リースフェルトに対して裁判長——判決が下された。裁判所での釈放要求は却下。審議されたこの件に関して被告人は、〔要求が〕認められなかった。…〔中略〕死刑執行⁽³⁴⁾。

リースフェルト処刑の原因になったとされる1542年版の『リースフェルト聖書』には、ルターの教えに依拠する新しい欄外注が追加されている⁽³⁵⁾。このルターの注釈に依拠する欄外注の内容が、リースフェルトの宗教改革派の思想を提示していると解釈されたことが、処刑の要因になったとも考えられている⁽³⁶⁾。

このように、『リースフェルト聖書』に宗教改革派の思想が提示されている一方で、リースフェルトの出版業績にはカトリックの教書やビラも認められることは注目に値する。例えば、16世紀、同時代の人々の間で既に有名だったカトリックの弁証家アンナ・ベインスの著作『リフレイン *Refereynen*』(1528年)を取り扱ったほか、1540年代からは、神聖ローマ皇帝カール5世による「異端」取り締まりの勅令などの印刷

も手がけている。また、リースフェルトが出版した聖書以外にも、ルター訳聖書に基づく聖書、さらに言えば、ルター訳聖書を参照した『リースフェルト聖書』の内容を模倣する聖書の出版が、当時のアントウェルペンでは盛んに行われていた⁽³⁷⁾。以上のことを考慮すると、宗教改革派の理念を孕む聖書の刊行は、印刷業者個人の信仰心よりも、購買層の需要増加といった社会的要求が一番の動機となっていたと考えられる。

また、16世紀の印刷物をめぐる規制と処罰に関しては、ルターが異端者とされその著作の販売・購読の禁止が定められてから、検閲の義務化、禁書所持者への追放、罰金、死刑まで、年代ごとに「異端」への対応の変化が見られる。例えば、1525年2月14日、アントウェルペンで出された異端書検閲に関する規定には「〔違反した者には〕罰として〔異端の〕書籍を没収し、市民権を剥奪、さらにアントウェルペン市とその辺境領から10年間追放する」とある⁽³⁸⁾。また、1540年9月22日、異端根絶のためにブリュッセルで出されたカール5世の勅令では「犯罪者と〔命令に〕従わない者に対しては、わずかの慈悲、偽り、猶予もなく、先に述べたような痛みを伴う厳しい処刑によって〔対応する〕」とされる⁽³⁹⁾。

リースフェルトは処刑の1545年以前にも、裁きの場へ呼び出されている。1536年には、検閲を受けずに書籍を刊行したとして異端審問所で事情聴取を受けているが、この時点では実際の刑を受けるには至っていない⁽⁴⁰⁾。一方で、1542年には、リースフェルトと同じアントウェルペンの印刷業者だったアドリアン・ファン・ベルゲンが異端信仰の罪で処刑されている⁽⁴¹⁾。

以上のことから、リースフェルトの処刑が行われた1540年代は、情報伝達媒体として当時大きな役割を果たしていた印刷物の取り締まりがさらに強化された時期だったことが分かる。規制が厳重になった時代、『リースフェルト聖書』は異端視を免れ得ず、リースフェルトの処刑によって当時の社会に対して異端信仰規制の効果が期待されていたと考えられる。

おわりに

以上検討してきたことから、印刷物に対する規制が厳重になった時代、その内容、形式ともに宗教改革派の聖書としての特徴を示す『リースフェルト聖書』は、異端視をまぬがれ得なかったと考えられる。そのタイトルページには、読者に直接聖書を読むよう促す独自の意匠が採用され、新しい信仰へと人々を誘う入口が表現されていた。また、祭具や建築物の図像が目立つ旧約聖書の版画挿絵からは、聖書を読む人の信仰心を築き、育てる寓意的表現を見て取ることができた。

さらに、『リースフェルト聖書』は、人々の信仰心を形作る「聖書」そのものを表象するイメージを内包しており、聖なる言葉を収めた構築物として読者に差し出されていた。それは人々の信仰心によって構築されるものとしての聖書でもあった。『リースフェルト聖書』はまさに、宗教改革派の理念「聖書のみ」と重なり合うかたちで世に送り出されたと言える。このような点に、宗教改革期アントウェルペンにおける『リースフェルト聖書』独自の位置付けを見出せるのではないだろうか。

本稿では、宗教改革期のイメージ研究の一環として『リースフェルト聖書』を取り上げ、版画挿絵を中心に「もの」としての書物の形式的な特徴に着目した。これによって、16世紀前半のアントウェルペンにおいて宗教改革派の理念を体現する聖書が、改革前の図像伝統を引き継ぐ一方で、新たな図像を発展させていたことが明らかになった。『リースフェルト聖書』でも確認したように、版画挿絵という複数性を持つ媒体の性質上、そこには様々なイメージの転用が見込まれる。印刷本聖書におけるイメージの使用について、『リースフェルト聖書』以降の聖書の例をたどることを今後の課題として、本稿を閉じることとする。

註

- (1) ここでは「プロテスタント」という語ができた 1529 年以前のことも扱うため、以下の文中ではルターに始まるキリスト教宗派を「宗教改革派」と表現する。
- (2) 16 世紀前半、アントウェルペン、パリ、リヨン、ケルン、ヴェネツィアなどと並んで西欧における一大出版地のひとつとなり、その出版の約半数は聖書や信仰書、祈祷書などの宗教印刷物だった。Marnef, Guido, *Antwerpen in de tijd van de Reformatie: Ondergronds protestantisme in een handelsmetropool 1550-1577*, Ph. D. diss., Catholic University of Leuven, 1991; reed., Amsterdam, Meulenhoff, 1996, p. 37 f.
- (3) *Ibid.*, p. 40.
- (4) Rosier, Bart, *The Bible in Print: Netherlandish Bible Illustration in the Sixteenth Century*, Chris. F. Weterings, trans., vol. 1, Leiden, Folio, 1997, p. 116.
- (5) ヤーコプ・ファン・リースフェルトの経歴は次の文献にまとめられている。Rouzet, Anne, *Dictionnaire des imprimeurs, libraires et éditeurs des XVe et XVIe siècles dans les limites géographiques de la Belgique actuelle*, Colletion du centre national de l'archéologie et de l'histoire du livre, vol. 3, Nieuwkoop, De Graaf, 1975, p. 129. 彼の聖書に関する出版全 19 版のうち、新旧両約聖書を揃えた完全版オランダ語聖書は 6 版 (1526、1532、1534、1535、1538、1542 年)。本稿では、ヤーコプの親族ハンスケン・ファン・リースフェルトが代理出版した 1538 年版の聖書も 1526 年以後の『リースフェルト聖書』の系譜に連なるものとして捉える。また、印刷本聖書のデータに関しては以下の 2 つを参照した。ネーデルラントで刊行された聖書の書誌情報と画像のオンラインデータベースである Biblia Sacra <<http://www.bibliasacra.nl>> (2015 年 10 月 29 日アクセス)、及び Rosier, *op. cit.*, pp. 143-351.
- (6) Hollander, August den, “Dat Oude ende dat Nieuwe Teatament (1526) : Jacob van Liesvelt en de nieuwe markt voor bijbels in de zestiende eeuw,” *Jaarboek voor Nederlandse boekgeschiedenis*, vol. 6, 1999, p. 106.
- (7) 1854 年のアルベルト・ファン・トーレンベルゲンによる著述から、リースフェルトは殉教者と同列に扱われるようになったことが分かる。François, Wim, “Jacob van Liesvelt: Martyr for the Evangelical Belief?,” Johan Leemans and Jürgen Mettepenningen, ed., *More than a Memory: The Discourse of Martyrdom and the Construction of Christian Identity in the History of Christianity*, Leuven, Peeters, 2005, p. 361.
- (8) Hollander, August den, *De Nederlandse bijbelvertalingen 1522-1545*, Nieuwkoop, De Graaf, 1997, p. 31; François, *op. cit.*, p. 341.
- (9) Rosier, *op. cit.*, p. 119.

(10) Eire, Carlos M. N., *War against the Idols: The Reformation of Worship from Erasmus to Calvin*, Cambridge et al., Cambridge University Press, 1986; Freedberg, David, *Iconoclasm and Painting in the Revolt of the Netherlands, 1566-1609*, New York, Garland, 1988; Dietz, Feike et al., ed., *Illustrated Religious Texts in the North of Europe, 1500-1800*, Aldershot, Ashgate, 2014. 宗教改革期のイメージ研究（特にドイツ）については、以下も参照。Scribner, Robert W., *For the Sake of the Simple Folk: Popular Propaganda for the German Reformation*, Cambridge et al., Cambridge University Press, 1981; Koerner, Joseph L., *The Reformation of the Image*, London: Reaktion Books, 2004.

(11) タイトルページ『リースフェルト聖書 *Dat oude ende dat nieuwe testament*』アントウェルペン、ヤーコブ・ファン・リースフェルト、1526年、二折判、274 × 179mm、アムステルダム大学図書館 (Ned. Inc. 119, a1r.)。

(12) アンドルー・ペティグリー『印刷という革命 ルネサンスの本と日常生活』（桑木野幸司訳）、白水社、2015年、167頁。

(13) タイトル枠内のテキストには版ごとに相違がある。例えば、1526年版にはタイトルと『申命記』4章2-3節及び6章6-7節の引用が記されていたが、1532年版にはタイトルと出版情報が記されている。このタイトルページはリースフェルト没後、その事業を継承したリースフェルトの未亡人によって1560年に刊行された聖書にも使用された。Rosier, *op. cit.*, p. 304.

(14) ただし版によっては、印刷段階の手違いによるものだろうか、このパネル内のテキストが左右の人物像の間で逆転している場合やテキスト自体に若干の異同が見られる場合もある。1542年版のタイトルページは、オランダ聖書協会によるデジタル版を参照できる。BijbelsDigitaal.nl “Liesveltbijbel (1542)” <<http://www.bijbelsdigitaal.nl/view/?bible=liesv1542>> (2015年10月29日アクセス)。

(15) “Josue . I. En laet dit boeck van deser wedt wt uwen mondt nyet comen, mer peyst daer om dach ende nacht”; “Psal. xviii Die geboden des HEREN sijn suyuer ende si verlichten die ooghen”; “Mar. xvi. Gaet in alle die werelt, ende predict dat Euangelium allen creaturen”; “ij Johan. i. Ist dat yemant tot u comt, ende dese leeringhe nyedt mede en brengt, dyen en nemet in uwen huuse nyet, en groet hem ooc nyet.” 聖書の引用には日本聖書協会『新共同訳聖書』を参照した。以下、訳文は筆者による試訳、〔 〕内は筆者補足。

(16) Rosier, *op. cit.*, p. 74.

(17) タイトルページ（旧約聖書）『フォルステルマン聖書 *Den Bibel. Tgeheele Oude ende Nieuwe Testament met grooter naersticheyt naden Latijnschen text gecorrigeert*』アントウェルペン、ウィレム・フォルステルマン、1528年、二折判、276 × 171mm、アムステルダム大学図書館 (Ned. Inc. 100, n1r.)。

- (18) Bruin, C. C. de, *De Statenbijbel en zijn voorgangers: Nederlandse bijbelvertalingen vanaf de Reformatie tot 1637*, F. G. M. Broeyer, ed., Haarlem, Nederlands Bijbelgenootschap, 1993, p. 111; revised edition of Leiden, A. W. Sijthoff, 1937.
- (19) 枢機卿フランシスコ・ヒメネス・デ・シスネロスの紋章。『フォルステルマン聖書』序文で、フォルステルマンが典拠として挙げる『コンプルテンセ多言語聖書 *Biblia Polyglotta Complutense*』(1517年完成)の監修者。
- (20) “VNVS DEVS. VNVS CONCILIATOR DEI ET HOMINVM. HOMO CRISTVS IESVS. QVI DEDIT SEMET IPSVM PRECIVM REDEMPTIONIS PRO OMNIBUS.”
- (21) タイトルページ、フェオヒイラクト『四福音書注釈 *In quatuor evangelia enarrationes*』バーゼル、アンドレアス・カラタンダー、1524年、二折判、バーゼル大学図書館 (Rc 92:2)。また、タイトルページ『新約聖書 *Dat Gants Nyewe Testament*』デーフェンテル、アルベルト・パフレート、1525年、八折判、ハーグ王立図書館 (KW 227 G 24) など。
- (22) Rosier, *op. cit.*, p. 14. 特に『創世記』の挿絵「ノアの箱舟」「イサクの犠牲」「ヤコブの夢」「ファラオの夢」は、ヴィッテンベルクのハンス・ルフトが1523年に出版したルター訳聖書のひとつ『ドイツ語旧約聖書 *Das Alte Testament deutsch*』の図像を忠実に写し取っている。また『出エジプト記』の祭具や幕屋の描写は、同じく1523年にヴィッテンベルクのメルヒオル・ロッターが出版したルター訳聖書『ドイツ語旧約聖書 *Das Allte Testament deutsch*』の図像を引き写している。ルター訳聖書の挿絵については以下を参照。Schramm, Albert, *Luther und die Bibel*, Leipzig, Hiersemann, 1923.
- (23) 例えば、以下の挿絵が挙げられる。「幕屋と幕屋を囲む庭」『フォルステルマン聖書』アントウェルペン、ウィレム・フォルステルマン、1528年、二折判、109 × 83mm、アムステルダム大学図書館 (Ned. Inc. 100, f5v.)。
- (24) 「幕屋と幕屋を囲む庭」『フォルステルマン聖書 *Den Bibel. Tgeheele Oude ende Nieuwe Testament*』アントウェルペン、ウィレム・フォルステルマン、1532年、二折判、91 × 68mm、アムステルダム大学図書館 (Ned. Inc. 525, e3r.)。
- (25) 初期印刷本はテキスト冒頭のみには版画挿絵を配置したものが多い。Rosier, *op. cit.*, p. 121.
- (26) Clifton, James and Walter S. Melion, ed., *Scripture for the Eyes: Bible Illustration in Netherlandish Prints of the Sixteenth Century*, exh. cat. (June 5 – September 27, 2009), New York, Museum of Biblical Art, 2009, p. 37.
- (27) Poortman, Wilco C., *Bijbel en prent: I. Boekzaal van de Nederlandse bijbels*, The Hague, Boekencentrum, 1983, p. 46; Rosier, *op. cit.*, p. 69 f.
- (28) リールのニコラウス『全聖書注解 *Postilla super totam Bibliam*』(ニュルンベルク、アントン・

コーベルガー、1481年)の版画挿絵については以下を参照。Schramm, Albert, *Der Bilderschmuck der Frühdrucke*, vol. 17, Leipzig, Hiersemann, 1534.

(29) Rosier, *op. cit.*, p. 69, note 1.

(30) 1601年以前に出版された全書籍の書誌情報カタログである USTC を参照。Universal Short Title Catalogue (USTC) <<http://www.ustc.ac.uk>> (2015年10月29日アクセス)。

(31) Migne, Jacques P., ed., *Patrologia cursus completus, series Latina*, 1854; reed., Paris, Garnier, 1880, vol. 176, 622 B: “Hujus vero spiritualis aedificii exemplar tibi dabo arcam Noe, quam foris videbit oculus tuus, ut ad ejus similitudinem intus fabricetur animus tuus.” このサン・ヴィクトルのフーゴー『道徳的箱舟 De arca Noe Morali』の一節に関しては以下の邦訳も参照。メアリー・カザラス『記憶術と書物 中世ヨーロッパの情報文化』(別宮貞徳監訳) 工作舎、1997年、79頁。

(32) 註14の引用を参照。

(33) Génard, Pieter, ed., *Het Antwerpsch Archievenblad. Bulletin des Archives d'Anvers*, vol. 8, Antwerp, Guil van Merlen, 1871, p. 347: “De Schoutet contra Jacob van Liesvelt: declaravit reus dat de boecken byden aenleggere gespecificceert, langhen tydt voer de placaten Ons Genadichs Heeren des Keysers…”

(33) *Ibid.*, p. 353: “De Schoutet contra Jacob van Liesvelt: judicatum, afslaende het relevement byden aenleggere geimpetreert, is de verweerdere in synen incidentalen versuecke gewesen nyet ontfangbaer. … EXECUTIO FACTA.”

(35) 例えば、『マタイによる福音書』7章6節の欄外注には「犬も豚も、神の言葉の糧を解する (Byde honden ende die verckens verstaetmen die vianden des woorts Gods)」とある。また、『ヨハネによる福音書』5章25節の欄外注には「神の子の声を聞き、その言葉を心に留め、信じなさい。それによって生きた言葉が霊となります (stemme des soons Goods hooren, dats sijn woordt int herte ontfanghen ende dat ghelooven, ende daerdoor levendich worden inden geest)」とある。

(36) Poortman, *op. cit.*, p. 84. 1542年版のタイトルページには、「本文の枠部分に未だかつてない素晴らしい注釈付き (met noch sommige schoone verclaringen op dye canten, dye op dander noyt geweest en sijn)」という宣伝文句があり、新しい欄外注が本書の特色のひとつだったことが分かる。

(37) Bruin, *op. cit.*, p. 125; Hollander, *op. cit.*, p. 189.

(38) Frédéricq, Paul, ed., *Corpus documentorum Inquisitionis haereticae pravitatis Neerlandicae: Verzameling van stukken betreffende de pauselijke en bisschoppelijke Inquisitie in de Nederlanden*, vol. 4, Gent, Vuylsteke, 1900, p. 309 f: “al opte pene ende verbuete vanden selven boecken, verbuete oeck van hueren poorteryen, ende daertoe opte pene van thiene jaren lanck vuyter stadt ende

mercgreefschap ghebannen te wordene···”

(39) Lameere, Jules and H. Simont, ed., *Recueil des ordonnances des Pays-Bas. Deuxième série: 1507-1700*, vol. 4, Brussels, Goemaere, 1907, p. 228: “tegens d’overtreders ende ongehoorsaemen by strenge executien van peynen boven verclaert, sonder eenighe gracie, simulacie oft verdrach···”

(40) Hollander, *op. cit.*, p. 31.

(41) Génard, *op. cit.*, vol. 7, 1870, pp. 301 ff.

ヤーコプ・ファン・リースフェルトの聖書

表1 『リースフェルト聖書』の旧約聖書の図像（部分）

主題	聖書対応箇所	1526年版の 頁番号	サイズ	掲載年
掟の箱と香を たく祭壇	『出エジプト記』 20:10-15,37:1-9; 30:1-5, 37:25-28	f1v.	161 × 107 mm	1526,1532,1534, 1535, 1538, 1542
幕屋の壁板	『出エジプト記』 26:15-24, 36:20-22/ 28- 31	f4v.	160 × 106 mm	上に同じ
幕屋を覆う幕	『出エジプト記』 26:1-3, 36:8-10	f5r.	161 × 104 mm	”
七枝の燭台、 供えのパンの 机、祭具	『出エジプト記』 25:23-40, 37:10-24	f5v.	163 × 104 mm	”
焼き尽くす 捧げ物の祭壇、 青銅の水盤	『出エジプト記』 27:1-8, 38: 1-7; 30:17-18, 38:8	f6v.	160 × 103 mm	”
幕屋と幕屋を 囲む庭	『出エジプト記』 26:1-37, 36:8-37, 38:9- 20, 40:17-33	f8r.	161 × 103 mm	”
ソロモンの神殿	『列王記上』 6:2-6	H7v.	103 × 82 mm	”
ソロモンの宮殿	『列王記上』 7:1-12	H8r.	81 × 104 mm	”
青銅の柱と前庭	『列王記上』 7:15-22	H8v.	103 × 81 mm	”
鋳物の海	『列王記上』 7:23-26	H8v.	105 × 80 mm	”
青銅の水盤	『列王記上』 7:27-38	11r.	82 × 104 mm	”